

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：23803

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531074

研究課題名(和文)外国人青少年の学び直しの場におけるeラーニングシステムの構築による教育方法の研究

研究課題名(英文)A study of instructional design through developing e-learning system for newcomers' community of learning

研究代表者

澤田 敬人(SAWADA, TAKAHITO)

静岡県立大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：20254261

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円、(間接経費) 1,050,000円

研究成果の概要(和文)：我が国に在留する日系ブラジル青少年を対象とし、豊かなメディアに囲まれた学習環境の中で地域社会や労働市場から求められる人材養成を目指した教育方法のあり方を探求した。自律的な学習を促進させるための学習マネジメントシステム、多様な学力レベル・学習ニーズ・学習目標に対応することのできるeポートフォリオ、さらに多様なマルチメディアの環境を学び直しの場として構築し、雇用に必要な能力を活性化させる様態を探った。

研究成果の概要(英文)：In this research, we looked for the effective way for young Japanese Brazilians in one of multicultural cities in Japan to acquire the skills which are essential to their works. Our hypothesis is that learning environment which is surrounded by rich media technology must foster learners' motivation for improvement of employable human capital. E-learning system was introduced for us to examine our hypothesis. We found that the community of learners was formed by the Japanese Brazilians' supportive environment through rich technology.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：ニューカマー メディア エンプロイアビリティ 社会参加 eポートフォリオ 学びの共同体 教育工学 日系人コミュニティ

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の開始当初における背景を述べると、1990年入管法改正に伴う日系ブラジル人の労働を伴う入国者数増加がもたらす帰結として、移住労働者の子弟が教育の場から取り残されているのではないかの懸念があり、当研究組織においても数々の調査研究を通じてその実態にアプローチしてきた。それらの調査研究は日本社会の底辺で滞留する日系ブラジル人子弟の暮らしを明らかにしつつ、その問題意識を受けてどのような支援を進めたらよいかという実践面での示唆を含んでいた。2008年以降のリーマンショック以後の経済停滞で従来以上に雇用上の苦境に立たせられる日系ブラジル人とその子弟の現実を鑑み、本研究組織において日系ブラジル人子弟の学び直しの教室設置という具体策を実践的な研究として進めていくことにした。リーマンショック以後の経済不況により、日本の労働市場における日系ブラジル人たちの難しい立場があらわになったが、2000年代後半からの経済不況は世界規模で広がったため、日本のみならず労働者として移民を受け入れる国はどこも同じ問題を抱えた。すなわち外国人労働者は、雇用の調整弁としての役割を負わされるために、大規模な経済不況期には真っ先に自分たちの雇用が危うくなる。外国人労働者は使い勝手の良い労働力であるのだが、そうではないとするなら、いったい何なのか。

一般に、出来事に意味を付与し、体験を知識に変換する記号の伝達媒体をメディアと呼ぶ。この定義を敷衍して、私的領域と公的領域を媒介する機能をメディアに求めるならば、都市はまさにメディアに他ならない。都市はメディアであるとするならば、当研究組織のフィールドである日系ブラジル人のいる浜松の都市空間で彼らへの眼差しを自由に制御できるホスト社会の住人は、浜松という都市空間を読むことのできる圧倒的な読解力の持ち主と、まずはいうことのできるかもしれない。その根拠として、浜松の盛り場、会社や工場を、コミュニケーションを生み出す空間として創造し、関係性を濃縮させる場所としての都市を作った立場としてのホスト社会、といえるのかもしれない。すると、1990年の入管法改正に前後して日系ブラジル人をオールドカマー、ニューカマーと呼ぶとするならば、その双方とも浜松という都市空間を創造し、それを読むことのできる圧倒的な読解力の持ち主であるとはいえない。ただ、オールドカマーにせよニューカマーにせよ、彼らなりに都市空間を読むことができるし、さらには、ホスト社会による彼らのいる風景の読み方に、修正を迫って交渉することも可能だ。そうしたメディア論的で都市論的な日系ブラジル人として、彼らのポジションを再定位させることは実にやりがいのある仕事といえる。

最近、教育におけるメディアに関する考察

を通して、教育と教育学そのものを再構築する糸口となる議論がなされている。その一つが今井(2004)で、そこではこれまで教育学が人と人との直接的な接触において真正な教育が生起するという信念を固持していた正にその部分に疑念を差し挟む。直接的と見られている関係が、実は人々に考えられているほどには直接的なものではなく、この場合は(教師と生徒の間の)言語という「中間にあって作用するもの」としてのメディアにどっぷりと浸されていると見る。これはメディアの教育利用などのテーマで取り上げられる透明で誤解のないコミュニケーションを可能にするメディアはもとより、不透明ですれ違いを生じさせ、謎めいたコミュニケーションをも可能にするメディアの位置の取り方が、教育と教育学の重要な焦点になるとの示唆である。言語が透明であるという想定と自明化された教育観との密接な関係を考慮すると、不透明なメディアが自明化された教育観を揺るがす可能性があるとする今井(2004)の問題提起は興味深い。また、不透明で失敗した教育的コミュニケーションであっても、コントロールにより修復は可能で、この場合にコントロールを担うのは、教育する者の屈折させられる意図などではなく、その不透明性や屈折をうまくコントロールすることのできるメディア、この場合は美的作品である。ここに大人と子供が適切にすれ違うためのメディアとして機能する可能性を見ている。メディア的な教育をニューカマーの青少年の利益になるものとして構想する場合、以上のような不透明な屈折したコミュニケーションを修復する適切なすれ違いというモチーフは、有効に利用することができるように思われる。

教育において日系ブラジル人はエスニシティの差異により、とりわけこのようなすれ違いが大きすぎると妄想されていたのだが、実は教育と教育学の文脈では、同じエスニシティ同士の教師と生徒の関係においても、すれ違いは大きい。メディア的な教育が、適切なすれ違いを正当に評価して機能すれば、彼らに大きな利益があるといえる。教育において誰にも起こり得るすれ違いを手掛かりにして、ニューカマーの青少年たちのメディア的教育の達成を期することができるであろう。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、我が国に在留する日系ブラジル人などの外国人青少年を対象とし、多様で豊かなメディアに囲まれた学習環境の中で、地域社会や労働市場から求められる人材養成を目指した教育方法のあり方を探求することにある。まず、外国人青少年による自律的な学習を促進させるための学習マネジメントシステム、また、多様な学力レベル・学習ニーズ・学習目標にも個別に対応することのできるeポートフォリオ、さらに多

様なマルチメディアの環境を外国人集住地区における学び直しの場に構築する。その際、ブラジル日系人を中心にした外国人青少年の生涯学習社会ならびに労働市場への十全な参加を促す教育方法について、学問的かつ実践的な観点から知見を得る。南米日系人青少年の学校経験は、受入国と送出国との移動によりきわめて多様な様相を呈しているが、どちらの教育制度においても不十分なものと想定しておく必要がある。南米日系人の青少年は、同世代の日本人青年と同様の経済社会への参入が望めず、主体的な社会参加をすることができずにいる。彼らへの学習支援のために設置している学び直し教室には、画一的な教育システムに馴染めず、早期に教育の場から離脱した経験のある者が多いが、これは日本語運用能力に加え、社会人として雇用につながる能力（エンプロイアビリティ）が欠如していることとつながる。この問題解決として、豊かなメディア環境に身を置いて個別の学習目標にも対応し得るeラーニングの活用によって、雇用に必要な能力を活性化させる。また、本研究課題では多文化共生の施策に関わる者や地域の日本語教師グループからの確かな情報提供を得ながら、地域ニーズを反映した教育コンテンツの開発を目指すとともに、ブラジルと日本におけるドキュメンタリーフィルムの上映に関する諸活動において、ブラジル日系人青少年の自己表現に向けた主体の形成を目標とする本格的な上映企画を催し、多様なメディアに囲まれた学習のあり方を、日本とブラジル教育界の間で模索する。さらに、自律的な学習を支援するためのeポートフォリオにおいて自らの学習歴を認識し、自らの学習をコントロールすることのできる学習環境がいかなるものかを探索する。

### 3. 研究の方法

本研究課題にとって情報技術のテクニカルな部分でIT専門会社との会合でeラーニングの使用を整えることが研究の前提として重要である。教育コンテンツは、地域ニーズを反映した形で日本語教育の他、職場で仕事をする社会人として求められる基礎的能力を中心に作成を行う。また、多様なメディアに囲まれたマルチモーダルな学習環境に置かれた日系ブラジル青少年の共同体による自己表現については、日本とブラジルにおいて日系人青年の互助組織であるマイノリティ・ユース・ジャパンの助力を得ながら青年たちの自己表現の場として映画の上映企画を行い、その成果をメディア論のもとにeラーニングによる成果の中に包摂する。このブラジルと日本における上映企画は、本研究課題の成果をブラジル教育界と共有するために開催するシンポジウムの形になる。

地域ニーズを踏まえた日本語教育とビジネススキルに主眼を置いて教育コンテンツを充実させ、テキスト（印刷物およびデジタ

ルコンテンツ）テスト（学力の面での効果を知る）の要素から構成されることに留意しつつ、eポートフォリオの設計・制作を進める。インターネットによる学び直しの教室は、これらの構成要素を集めた学習空間として、生徒、教師、支援者、運営者が集まる学びのための共同体として機能させる。その様態を知るためにデータを取ることが、本研究課題の中心的な知見を得るための方法となる。

また、本研究課題における日系ブラジル青少年のコミュニティの自己表現として実施する映像部門を含めつつ、日本・ブラジル間の国際教育協力が可能になるような両国の交流企画を実施する。

### 4. 研究成果

日系ブラジル青少年のエンプロイアビリティと自己表現力の発揮を目指しつつ基礎学力の定着を重視する学び直しの場のeラーニングによる創成について、3年間で研究成果を挙げるために取り組みを進めてきた。その最大の成果は、「インターネット中学校」と異名をとる日系ブラジル青少年のためのeラーニングによる学び直しの場である「わたぼうし教室」を本格的に機能させ、日系ブラジル青少年が地域社会で雇用されやすい教科目による学びをネット空間で実現し、その参加者としての生徒、教師、支援者、運営者、研究者の共同体が、学びの共同体の拡大版として広がることを確認した。本研究課題においてとりわけ重視した能力はエンプロイアビリティに係るものであったが、これを日本語教育を含めた各教科目の学びに落とし込んで意識化し、地域の雇用情勢に通じた教師、支援者（マイノリティ・ユース・ジャパンの青年たちを中心とする）が学習を必要とする青少年たちを巻き込む形で学びを形成する様態が確認できた。この「わたぼうし教室」の他に、青少年共同体の自己表現力の養成を通じた創造力の発揮を目指す映像メディアの諸活動についても順調に進め、「わたぼうし教室」のコーディネーターとして支援するマイノリティ・ユース・ジャパンの青少年たちが、映像プロジェクトでもいかに実力を発揮し、同時に地域に受け入れられ、複数の共同体がまじりあってその規模、質、強度を増すことを確認した。

以下に、「わたぼうし教室」に関する調査データを紹介する。

教室の概要：自分の好きな時間と進捗に合わせて学べる機会として開講した「わたぼうし教室」のコースは、Class AQUA（中学校卒業程度認定試験対策）、Class ASTRO（日本語能力試験対策）の2つである。わたぼうし教室のサイトの学習教材を使って学ぶが、学習支援に加えて、最も重視しているのは、「学びの共同体」をつくることである。「教える人・教えられる人」という直線的で一方向の関係ではなく、受講生を中心に、チュー

ターや講師、コーディネーターなど、「わたぼうし教室」に関わるすべての人が、同心円状にいて、互いに学び合い、支え合う学習環境を構築し、受講生に対して「居場所」となるような教室を提供する。学習形態は、インターネットを利用した学習 (ONLINE LEARNING) と教室での授業 (CLASSROOM LEARNING) がある。受講生が個別に学習内容と目標を設定。学習教材等を使っての自主学习や、メール等を通じて受講生と講師がやり取りして、学習支援と精神的支援を行う。

#### 「わたぼうし教室」実施状況

(1)実施期間：平成 26 年 2 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日

(2)スタッフ：講師、チューター、コーディネーター：36 人

スタッフの国籍：日本、ブラジル、米国、中国、ベナン

(3)受講生：11 人 受講生の国籍：ブラジル

(4)動画授業について：Class AQUA = 文部科学省が毎年 11 月に実施する「中学校卒業程度認定試験」の合格を目指す。英語 (TOEIC) 16 回 (第 13 回撮影中)、英語 (基礎) 16 回 (第 14 回撮影中)、数学 8 回 (撮影済み)、理科 8 回 (第 7 回撮影中)、社会 8 回 (第 6 回撮影中)、Class ASTRO = 「日本語能力試験」の合格を目指す。経済不況以降、多くの外国人が解雇される中、日本語能力が雇用される能力 (エンプロイアビリティ) として再認識されるようになったことが背景にあり、本コースを設置した。N5 コース 16 回 (第 15 回撮影中)、N3 コース 16 回 (第 14 回撮影中)。

#### 受講生の状況

(1)準備段階：当初は、日常会話には不自由していない学齢期を過ぎた「第二世代」の「学び直し」、特に「中学校卒業程度認定試験」の準備を念頭に置いていた。そのため、パワーポイントを使った文字教材を準備し、受講生にはサイト上で自主学習の機会を提供し、講師等とはメールで質疑応答や意思疎通を図るという学習手順を考えていた。

(2)受講生のニーズ：しかし、実際に受講登録を始めてみると、予想に反して日本語の読み書きができない「第二世代」が多く、中には日本語の日常会話が困難な人もいた。そこで、急遽、ポルトガル語の通訳付の動画授業を作成することになった。また受講理由の中には、「日本語能力試験」の準備や「英語習得」の希望が多かったため、「日本語能力試験」コースを増設し、「中学校卒業程度認定試験」コースの英語には「TOEIC」を盛り込んだ。それぞれの状況やニーズは多種多様だ。例えば「中学校の予習・復習を手伝ってほしい」「大学受験の準備をしたい」「英語のレベルアップ」「日本語能力試験を受けたい」「スプレチーボ (高校卒業資格) の準備をしたい」「日常会話ができるようになりたい」などが挙げられる。

(3)受講生の年齢：現時点の登録者は 11 人。内訳は、「第二世代」が 9 人 (10 代 2 人、20 代 6 人、30 代 1 人) と「第一世代」が 2 人 (40 代)。

(4)人間関係づくり：受講生で日本語の日常会話ができる人は 2 人ほど。ほとんどの受講生は、日常会話や読み書きが困難である。受講者のニーズに合わせて、コースの増設や、学習教材の準備を行ってきているが、パワーポイント教材等で学習を始める以前に信頼関係を築くことが不可欠だった。そのため、コーディネーターを介して受講生の状況を把握すること、SNS やインターネット無料電話を使っての人間関係づくりに力を入れることになった。

(5)学習内容：受講生のうち 9 割は、日本語の学習を希望。既にサイト上の教材等で学習を始めているが、自主学習が難しい人が多く、教材も個別対応をする形になっている。

(6)問題点：現時点の一番大きな問題は、サイト上にホームルームや保健室などを構築する作業が大幅に遅れていることだ。ホームルームや e ポートフォリオのデザインは既にできているものの、サイトには反映されていない。その結果、受講生の学習歴と講師の指導歴がサイト上には記録として残されていない。WEB が完成した際には、数カ月間の学習支援の記録をコピーすることが不可欠である。

#### 学びの共同体としての拡張する機能

(1)居場所としての役割：「わたぼうし教室」の目的は、「学び直し」としての学習支援だけではなく、「学びの共同体」の構築にある。日本において、家庭や学校、社会で保護されることなく育った「第二世代」が、さまざまな人とつながり、居場所と感じられるような「共同体」作りを重要視している。精神的な病を発症し、自ら動くことが制限され、家庭でも社会でも文字通り孤立状態にある人も学習者として参加しているが、自宅で「学び直し」や「友達づくり」「居場所づくり」ができて、しかも「精神的な支援」が受けられる「わたぼうし教室」は、インターネットだからこそ実現できるものである。また受講料が無料であるため、C さんのように収入のない人にとって、学び直しの絶好のチャンスになっている。また、働きながら子育てをしている「第二世代」の母親にとっても、自宅で学べる「わたぼうし教室」の e ラーニングシステムは、将来への可能性を広げるツールとなっている。

(2)「第二世代」の活躍の場：コーディネーターとしてかかわってくれる「第二世代」の若者たちの存在は重要である。日本語もポルトガル語も堪能な「第二世代」の若者たち (コーディネーター) は、彼らの語学の才能と日本で生活した経験を生かして、受講生と講師の橋渡しをしてくれる。講師にとって、コー

ディネーターは、受講生の置かれた状況を知らせてくれる「窓」、そして受講生にとっては自分たちの状況を伝えてくれる「代弁者」と言える。また、ポルトガル語付の動画授業の制作をする上でも重要な役割を担ってくれている。「わたぼうし教室」は、「第二世代」の若者の才能を生かせる場でもある。

(3)地域を超えた協力体制：eラーニングの良さとして、どの地域からでも参加できることである。現在、講師・チューター、コーディネーターは、東北（福島）から九州（福岡）まで広範囲から参加している。学習支援や人間関係づくりを、物理的な場所に縛られることなく、インターネットを活用してできるというだけでなく、実際に生徒の一人がタッチ・ラグビーの全国大会で、静岡から東京に出向いた際は、関東の講師が試合会場に応援に行くこともできた。インターネットを使って各地の講師やチューター、コーディネーターがネットワークをつくっているからこそ、実現可能だったと言える。

個々の学びの実際 事例研究：「第二世代」の女性Aさん（20代後半。「日本語を勉強したい。スプレチーボ（高校卒業資格）の受験準備をしたい」）

「わたぼうし教室」で最も成果があった受講生と言える。Aさんは、ブラジルの高校を中退して、16歳で両親と共に来日。日本に適應するストレスから精神的な病を発症。その後、服薬と自宅療養が続き、約10年間、地域社会と断絶された状態で生活してきた。友達がいなく、日本語が不自由、両親がAさんの病気を正しく理解していないなど、Aさんは完全に孤立した状態にあった。知人から「わたぼうし教室」の存在を知らされたCさんは、「日本語を勉強したい」と、自ら受講希望のメールを送ってきた。

まず、コーディネーター兼講師がAさんの家庭訪問を行い、「わたぼうし教室」のサイトの使い方について説明し、ポートフォリオ作りを手伝った。翌日からほぼ毎日30分ほどインターネットの無料電話を使って、日本語の授業を続けている。Aさんは自主学習が難しいため、Aさん用に文法教材を準備している。Aさんが自己流で覚えた日本語は間違いが多い。Aさんにとっては、これまで日本語を勉強する機会が皆無であったため、「わたぼうし教室」で単語の一つ覚えるたびに、「将来への希望が見える」と学習意欲を膨らませ毎日勉強することを望み、頑張っている。

日本語の学習に加えて、講師・チューターとのSNSでのやり取りを通して「外の世界」につながったことで、Aさんには大きな変化が見られている。精神的に元気を取り戻しつつあり、学習意欲が増し、またオシャレにも興味を持ち、髪型を変えたり、薬の副作用で太ってしまった体のダイエットなども始めたりして、自分のこれまでの生活を変えてい

こうとしている。

ただ依然として病気の問題は深刻で、専門的な治療が必要である。回復を妨げている要因は幾つかあるが、状況を改善する試みとして、「わたぼうし教室」では日本文化を学び、日本人と交流する機会として「フィールド・トリップ」を企画。第1回「フィールド・トリップ」として、精神障害者の外部グループのピクニックに講師と共に参加した。友達をつくると同時に、そうしたグループにつながることで、精神医療専門のカウンセラー等に「わたぼうし教室」にかかわってもらえるきっかけをつくった。今後も「わたぼうし教室」にさまざまな分野の専門家に参加してもらいながら、多方面からAさんを支える支援体制作りに取り組んでいく予定である。

事例研究：「第二世代」の女性Bさん（20代後半。「大学を受験したい」）

現在、介護の仕事に携わるが、転職や専門知識のレベルアップのために、大学の看護学部の受験を考えている。まだ受験する大学は決まっていないが、Bさんへの支援は、まず将来についての相談から始まった。講師が相談内容を聞き取り、またBさんが気軽に講師に相談できるような人間関係づくりに努めた。これまでBさんが講師と面談した際には、浜松市内の大学案内パンフレットの収集、また他の「第二世代」のブラジル人との交流の橋渡しを行った。

学習支援としては、SNS等のやり取りを通して人間関係をつくりながら、日本語の習熟度を把握するように努めてきた。複数の講師・チューターがBさんにかかわっているが、成果としては、文字媒体を中心にしたeラーニングだからこそ、受講生の日本語の習熟度がより明らかに分かってきたことだ。

Bさんの日本語の問題点は、文章に助詞があまり使われていないこと、耳で覚えた日本語であるため、間違っ覚えていて言葉が多い。例えば、「場合」を「ばい」、「と思う」を「ともう」、「どうも」を「ども」と表記。「です」「ます」を使った「書き言葉」が習得しきれていない。

Bさんは、「生活言語」の問題はないが、「学習言語」には多くの問題を抱えていることが判明した。今後は、「書き言葉」を中心に学びながら、語彙を増やし、また助詞の使い方など基礎の学び直しを進めていく。働きながら子育てしているBさんにとっては、自宅で学べる「わたぼうし教室」は、自分の空き時間に学習支援が受けられる場として役立つようだ。

コーディネーター兼講師（大元麻美）による評価：わたぼうし教室について

インターネットを使って、物理的な場所を超えて、講師や受講生など参加者がお互いにつながり、受講生を励ますことができたことは大きな意味があった。特に、病気や育児な

どの諸事情で、なかなか外出できず、また経済的にも苦しい受講生たちにとって、自宅で学ぶチャンスをつくることができ、「学び直し」のための選択肢を増やせたことは良かったと思う。受講生の中には、自宅に「引きこもり」状態の人もいるため、インターネットだからこそつながれて、「孤立」をくい止めることができたことは、一番の成果だと思っています。しかし、教室はスタートしたものの、WEBサイトに未完成な部分があったため、特にホームルールを開けないこと、学習ポートフォリオにその成果を書き込めないことは、大きな痛手となりました。WEBサイトが隔々まで機能していけば、今まで以上に、双方向のやり取りや、助け合いが活発になります。オンライン教室の可能性は計り知れないと感じています。

改善案：

(1)共同体づくり

「わたぼうし教室」の特徴である「ホームルーム」を生かして、受講生同士の交流、また受講生と複数の講師との交流を促進させ、「学校」の機能を果たせるようにしたい。

(2)動機付けの維持

学習意欲が維持できるように、「学習ポートフォリオ」を充実させて、学習のみならず、趣味や特技など、受講生の特技を励まし、表現の場となるようにする。また「ファン・プロジェクト」や「フィールド・トリップ」を充実させていく。

(3)教材の充実

個々の受講生のために準備した個別学習教材を、パワーポイント教材等に反映させる手立てを考え、「わたぼうし教室」の財産となるように工夫をする。

(4)人材の確保

実働できる講師やチューター、コーディネーターの確保、および医療関係者や弁護士など、さまざまな分野の専門家にかかわってもらい、教室を充実させていく。

(5)他の教育機関との連携

現在ブラジルのリオデジャネイロ州立大学と連携し、日本語及びポルトガル語の学習教材の提供を検討している。

参考資料：公式WEBサイトの利用状況（2014年1月1日～4月30日）

セッション（カウント）数：1,081

ユーザー：143

ページ閲覧数：13,553

ページ/セッション：12.54

平均セッション時間：13分55秒

直帰率：12.86%

新規セッション率：13.04%

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計2件)

澤田敬人「構築主義と教育言説の比較研究」『ことばと文化』第17号、2014年、23-37ページ。

澤田敬人・津村公博「ニューカマーとメディア」『移住システム研究レター』第5号、2012年、2-4ページ。

〔学会発表〕(計4件)

澤田敬人「日本人の学力と想像上の国際競争をめぐる言説」韓国日本研究総連合会第3回国際学術会議&シンポジウム、2014年4月12日、於韓国大田大学校。

澤田敬人「学力低下をめぐる言説と対抗言説」韓国日本文化学会第45回秋季国際学術大会、2013年10月26日、於韓国南ソウル大学校。

白鳥絢也・津村公博・澤田敬人「南米日系人の子どもを対象とした教材開発に関する研究」日本比較文化学会中部支部第3回研究会、2012年9月22日、於静岡労政会館。

津村公博・澤田敬人「デカセギの子どもに生まれて『孤独なツバメたち』上映会を含む」ブラジル連邦リオデジャネイロ州立大学文学部日本学講演会（招待講演）、2011年8月29日、於ブラジル連邦リオデジャネイロ州立大学。

〔図書〕(計1件)

澤田敬人『多文化社会を形成する実践者たち メディア・政治・地域』オセアニア出版社、2012年、全253ページ。

〔その他〕

多文化共生インターネット学び直し教室「わたぼうし教室」ログイン画面URL  
<http://www.wataboshi.org/teacher/login>

6. 研究組織

(1)研究代表者

澤田敬人（静岡県立大学・国際関係学部・准教授）

研究者番号：20154261

(2)研究分担者

津村公博（浜松学院大学・現代コミュニケーション学部・教授）

研究者番号：30310551

松尾知明（国立教育政策研究所・統括研究官）

研究者番号：80320993

白鳥絢也（星槎大学・共生科学部・講師）

研究者番号：40600383